

頭陀袋

④ 平成二十七年十二月号

発行 中山かんのん

恩林寺



中山中学下、電話三四一―二四五

無財の七施

「ありがとう。」「おかげさまで。」という気持ちを行動で表す身近な実践として雑宝蔵経（ぞうほうぞうきょう）というお経の中に「無財の七施」があります。佛教には人々が人間形成に努めてしあわせや安らぎの境地に至る道として、六波羅蜜の行があり、その第一番目が布施です。布施の「布」は分け隔てなくあまねく「施」は文字通り施すという意味です。万人に等しく施しをする人はもとより受ける人の心も清く布施の内容も清らかであることが大切であると説かれています。世間一般の損得勘定では与えた人よりも与えられた人のほうが得をするようなイメージですが、布施は施したほうが幸せな気分になり、与えられた人よりも与えた人を幸せにするのではないのでしょうか？お経には無財の七施をおこなうことで大いなる果報を得る。と、説かれております。私たちの日常生活において、お金がなくても物がなくても周りの人たちに喜びを与えていく。少しでも喜んでもらうというのが無財の七施の教えです。このように身近の奉仕や実践によって自分を高めることができ、人の心を和ませることができのです。あら

ゆる分野がつながりあつてこの世の中は成り立っていることを思えば人との出会いはもちろん、お互いに助け合い支えあつて生きていくことを心がけねばなりません。その七施とは

① 眼施（げんせ） 優しいまなざし

目は口ほどにものをいう。相手を思いやる心で相手を見つめるとお互いがうちとけることができるでしょう。

② 和顔施（わがんせ） にこやかな顔で接する。顔はその人の気持ちを表します。和やかで穏やかな笑顔を絶やさないようにしましょう。また、メールの顔文字も工夫してみましょう。

③ 言辞施（ごんじせ） 優しい言葉で接する。
言葉は人間関係を円滑にするコミニケーションの大事な方法です。相手を思いやる優しい言葉で接していきましょう。「こんにちは」「有難う」「おつかれさま」優しい言葉はたくさんあります。

④ 身施（身施） 自分の体で出来ることを奉仕する。
重い荷物をもって差し上げる。お年寄りや体の不自由な方をお手伝いするというような奉仕です。よいと思ったら実行し、相手の喜んでいただくと同時に自分の心も高められます。

⑤ 心施（しんせ） 他人のために心をくばる。
心の持ち方でももの見方が変わってしまうように、心はとても繊細

なもので自分だけがよいのでなく
心底、ともによるこび他人の痛み
や苦しみを自分のこととして感じ
とれば本物でしょう。思いやりの
心から自然といい顔、やさしいま
なざしになるでしょう。

⑥ 床座施（しょうざせ）席や場所を
譲る。「どうぞ。」のひとことで電
車や会場でお年寄りや困っている
方に席を譲る。座席だけでなくす
べてのものを分かち合い譲り合う
ことが大切です。なにごともし独り
占めはいけません。

⑦ 房舎施（ぼうじゃせ）四国には今
もお遍路さんをもてなす「おせつ
たい」という習慣が残っています。
昔はホテルや旅館がありませんか
ら、一夜の宿をお接待するという
ことがありました。普段から来客
に対しあたたかくおもてなししま
しょう。また雨宿りやあいてに傘
をお貸しするのもこの行いの中に
含まれるかもしれせん。

*（おしょうさんのひとりごと）

もう、ずいぶんむかしのことになりませんが、
私は若いころ、高山は下二の町の屋台蔵（鳩
峯車）の隣に「林フジ」先生と、妹の「林
千代子先生」の姉妹が住んでおられ、私た
ちはお茶の先生である千代子先生の弟子と
して通っており、「フジねさま」「千代さま」
の通称で呼んでおりました。お稽古場は二
階の十畳で、隣に水屋があり、茶巾盥のわ
きにこの（無財の七施）の解説が貼ってあ
りました。フジねさまが貼られたものでし
ょう。こうした言葉があるというのを知っ
たのはこういう御縁でした。そのほかに千

代さまが手書きで（心頭を滅却すれば火も
また自ずから涼し）というのが貼ってあり、
これは武田信玄のお師匠さん、甲斐の恵林
寺快川和尚の句であります。私たち、ずぼ
らな弟子たちに対する（お稽古の間ぐらい
我慢して勉強せよ。）という、戒めの言葉で
あったように思います。フジねさまは長年
教育者として名高い方であったばかりでな
く、身障者施設、山ゆり学園の生みの親と
しても知られております。お二人の生活は
極めて質素で、フジねさまがお亡くなりにな
ったとき裏の居間のかたづけをお手伝い
させてもらいましたが裏庭に向かって雨戸
にあたるガラス戸がなく、ふきさらしにな
っていたのには驚きました。千代さまは山
田五十鈴似の上品で美人だったのに比べ、
フジねさまはいかつい顔の男性的な性格だ
ったのを思い出します。しかし千代さまに
はとても厳しく、私たちにはとてもやさしく、
てくださいました。「千代はええなあ、いい
お弟子がたくさんあって。」が、口癖でした。
また、弟子仲間には、「千代をどうか頼みま
すぜな。」千代さまが一人になられた時を心
配しての言葉だったように思います。確か
にフジねさまは心優しい方でありました。
かれこれ五十年前のことではあります
（無財の七施）は林フジ先生が私たち弟子
仲間がこんな心がけていてくれればの親心
であったように思います。無財の七施の解
説をさせていただくに当たり、蛇足ではあ
りませんが、昔話を紹介いたしました。（合掌）

除夜の鐘

ご案内には少し早いかもしれませんが
十二月三十一日午後十一時より。

お寺へお出かけください。心の切り替
えをして新しい年を迎えましょう。